

失敗を怖がらずに 世界に羽ばたこう



多くの学生が熱心に聴講した

赤坂清隆・元国連広報担当事務次長が講演

元国連広報担当事務次長で現在、公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長を務める赤坂清隆氏を講師に招いた、文学部英語英米文学科の芸術講演会が10月19日、



▲ 学生に笑顔で語りかける赤坂氏

生田キャンパスで開催された。赤坂氏は「グローバルに働くことの魅力」をテーマに、「今、世界で活躍できる日本人が求められている。皆さんの活躍を期待しています」

と聴講した約240人の学生にエールを送った。国際機関で活動する魅力が「大きな充実感を得ることができる」とし、印象深かった出来事として、「ポリオ撲滅のためミャンマーを訪問した際のエピソードを披露。『ワクチンを接種している子どもが私を見てニコッと笑ってくれた。この子が小児まひにかかると、涙

が出てきたと思うと、涙が出るほどうれしかった」と振り返った。また、国際的に活躍するために求められる資質として、

異文化との触れ合いが大事

在外公館などで日本政府の代表として活動した一方、4つの国際機関で17年にわたって活躍し、国際平和に貢献した赤坂氏。世界を舞台に活躍したいと思う学生へのメッ

「国際機関で働くことで得られるやりがいとは、何でしょう。充実感です。国際機関は理想を追求する場です。核をなくす、死刑をなくすといった大きな目標を掲げ、前向きに活動できます。必要とされる地域に直接行って活動するため、成果が目に見えるのも魅力です。」

「国際機関で働きたい」と思っている学生へアドバイスを。国際機関で働く日本人は少なく、多くの若者に挑戦してほしい。新卒での採用を目指しがちですが、国際機関に大学を出てすぐの人はいません。NGOやボランティア、企業で経験を積むことも必要です。

1948年大阪府生まれの京都大学卒。外務省入省後、GATT(WTOの前身)事務局、WHO事務局、国連日本政府代表部大使、OECD事務次長などを歴任し、07年4月から5年間、国連広報担当事務次長を務めた。12年8月から現職。



計 報

佐々木金三氏(ささき きんぞう) 名誉教授・元法学部教授
10月24日、94歳で死去。
1954年から92年まで在職。法学研究所長など歴任。主な担当は物権法。

役員改選	
役員 (◎は新任、敬称略) 理事長 日高義博 理事 矢野建一 (専修大学長) 理事 坂田隆 (石巻専修大学長) 副理事長 富山尚徳 (法務、人材育成担当) 専務理事 松木健一 (学務、法科大学院、入学センター、情報システム) 常務理事 佐藤猛 (財務、募金、体育担当) 常務理事 田中實 (総務、140年記念事業担当、募金担当、石巻専修大学副担当) 常務理事 湯浅敏明 (学生生活、就職、校友) 常務理事 市川辰雄 (石巻専修大学、30年記念事業担当、募金副担当)	常務理事 小野博良 (理事長室、企画広報担当) 理事 宮岡孝之 理事 甘竹秀雄 理事 桃野直樹 理事 馬場杉夫 (経営学部長) 理事 江原淳 (ネットワーク情報学部長) 理事 佐々木重人 (商学部長) 理事 白藤博行 (法学部長) 理事 坂本武憲 (副学長) 理事 長野宏 理事 内山哲朗 (経済学部長) 理事 廣瀬玲子 (文学部長) 理事 山上精次 (人間科学部長) 理事 ◎田村裕二 (学務担当補佐) 理事 ◎小宮多喜次 ◎山田長満 ◎今野健吾 瀧本和男 ◎水崎保男

新役員紹介



田村 裕二(たむら・ゆうじ)
本学経営学部卒。83年(学)専修大学入職。学長室代表取締役社長、東京二〇二〇税理士法人理事長。56歳



山田 長満氏(やまだ・おさみつ)
慶應義塾大学大学院修士課程修了。(株)経理バンク代表取締役社長、東京川崎商工会議所会頭。(学)専修大学評議員。68歳



小宮 多喜次氏(こみや・たきじ)
本学法学部卒。東京消防庁消防総監。消防栓標識(株)取締役会長、東京共済生活協同組合理事長。(学)専修大学監事、本学校友会会長。77歳



水崎 保男氏(みずさき・やすお)
本学法学部卒。東京消防庁救急部長、同総務部長。NNT東日本総務人事部調査役。(学)専修大学評議員、本学校友会副会長。69歳

新たな発見から“常識”に迫る



秋恒例の人気公開講座「歴史を紐とく」(エクステンションセンター主催)が、10月に生田キャンパスで開催された(3・10・17日、全6講座)。今回は「新出資料が示す新たな古代史像」揺らぐ

「歴史を紐とく」(エクステンションセンター主催)が、10月に生田キャンパスで開催された(3・10・17日、全6講座)。今回は「新出資料が示す新たな古代史像」揺らぐ

「白熱の法廷劇 公開模擬裁判」法学部主催の公開模擬裁判が、10月10日、神田キャンパスの法廷教室で行われ、法学部の学生たちが白熱の法廷劇を演じた。神田鳳の期間中、高校生や大学生をはじめ多くの見学者が傍聴席を埋めた。裁判長を元検察官の遠藤浩一、検察官を元検察官の遠藤浩一、弁護側(右)が異議を唱える

「白熱の法廷劇 公開模擬裁判」法学部主催の公開模擬裁判が、10月10日、神田キャンパスの法廷教室で行われ、法学部の学生たちが白熱の法廷劇を演じた。神田鳳の期間中、高校生や大学生をはじめ多くの見学者が傍聴席を埋めた。裁判長を元検察官の遠藤浩一、検察官を元検察官の遠藤浩一、弁護側(右)が異議を唱える

人気公開講座「歴史を紐とく」

とに古代日本と中国の人々の暮らしに迫った。10日の講師は、同講座で長年講師を務めてきた荒木敏夫教授と矢野学長(いずれも専門は日本古代史)。常連のファンも多く、それぞれ約300人が聴き入った。

荒木教授は、奈良県明日香村の石神遺跡から多数出土した「五十戸」と表記のある7世紀後半の木簡を取り上げた。「五十戸」は地方の行政組織の最小区分で、680年代以降は同じ意味で「里」が使われるようになったため、万葉集ではサトと読むのが通例だ。荒木教授は「日本書紀では五十を『イ』と読むのがほとんど。サトとは読めない史料が数多くある」と指摘。「五十戸は『イヘ』『イソヘ』と読むのが妥当だが、それでは万葉集の歌の意味が通

じなくなる。どう読むのが適切なのか、サトでいいのか問題提起していきたい」と語った。「ご無沙汰しておりませう」とあいさつから始めた矢野学長は、「日本では新出で書力があると好まられ、土器に墨書きして雨乞いに使った」と解説。消滅した理由を「密教系消滅した理由を」密教系の加持祈禱が伝播し取っ替わったためとした。14年目を迎えた同講座は、聴講者が累計で延べ2万5000人を突破。甲(よろい)を着た人骨が見つかり「世紀の発掘」と評判の群馬県金井東裏遺跡について(3日)や、秦漢時代の家族や裁判について(17日)と、古代へのロマンをかきたてた。